



くノ一達が強引な  
販促活動をします



カキ

カキ

「さして、今晚のオカズはなんにしようかな？  
……デジ同人を買うとするか。どれにしよう  
かな」と

僕はデジ同人販売サイトのブックマを開き、  
エロいCG集作品の物色をしていた。

スツ...

「こんばんは」

「はい、こんばん……」

突然の挨拶に答えかけたが僕は一人暮らしで、  
こんな怪しげな格好のお姉さんが部屋に来る  
予定も心当たりも全く無かった。





「えっ、ちよっ！誰あんたっ！」

「おっと、お静かに落ち着いて」

目にもとまらぬ速さでなにか鋭い武器を首元に突きつけられた。

「ひいっ!？」

「静かにして下さい」




変質者か強盗かわからないがこのお姉さん、  
只者ではなさそうだった。

全く音を立てず部屋に入り込む技術、武器を  
出したときの身のこなし。  
下手に逆らうのは危険過ぎるだろう。

「う……は、はい。わかりました」

「うふふ、聞き分けのいい人でよかった」



僕が大人しくなったのを確認するとお姉さんは武器を首から離した。

「あ、あなたはいったいなんの用で……」

「エッチなCG集を購入しようとしてましたよね？」

「えっ!？」

「してましたよね？」

「は、はい」



「エッチなCG集が欲しいなら

「ムハキヤ」

というサークルの作品を選んでみてはいかがが  
しょうか？」

「はあ？そんなサークル聞いたことも……」



「お兄さん！長生きするには発言に気をつけることがとても大切ですよ」

「う、ぐ……」

「さあクリックしてください」



「あ、なんかムハキヤって結構作品数あるな。でも販売数は別にたいしたこと」

「……お兄さん」

「あ、いやっなんでもないです」

「今回はくノ一ものシリーズをご購入してみ  
てはいかがでしょう？」

「くノ一？えっと、なんかいくつか出てきた」

「綺麗なくノ二が秘密を聞き出そうと色仕掛けで  
ときに強引にときに優しく男に尋問攻撃をします。  
受け身の快樂作品、いいと思いませんか?」

「ふくむ……でも僕は  
特にそういう趣味は」

「あら、受け身で攻められて  
焦らされる快樂をご存じない?  
では味わってみましょうか。」

梓、お願い」

「ういっす!」

「梓? えっ誰? 何?」

スッ



「ひやおおっ!?!」  
気がつくと股の間に  
別の女性がいて  
あっという間にズボンを  
脱がされてしまった。  
「動かないで。とでも  
気持ちいいことを  
するだけですよ」





「葵、この兄ちゃん脱がされただけで既に  
ビンビンになってるよ」  
「ふふ、今から味わう快楽を本能で予感して  
いるのでしょう」

ビ  
ク  
ン

ビ  
ク  
ン



「んふっ、それじゃ  
いただきま〜すっ  
じゆるっ、ちゅっ  
ちゅ……んんっ」  
「くおおおっ!!」  
「なんという舌使いっ」  
「じゆるるっちゆるっ  
んんっちゅぷっ!」

「さてここからは  
簡単な作品紹介を  
していきます。  
もう武器は使いません。  
あくまでも、  
お兄さんの意思で  
購入するかは決めて下さい」  
「うう、くうう」  
「じゅぶぶっ、ちゅるっ！」



「くノ一達が体で男を尋問します」

「捕らえられた忍びの男が」

くノ一達から快樂攻めの尋問を受ける、

シリーズの第二弾になります」

「あつ、この登場人物は！」

「うふふつ、誰か似ている人でも

いましたか？」

「ちゆるっ、クチュ

じゅぼっちゅっ」

「あつああつ

そんな吸っちやつ

くううっ」

ピ  
チ  
ュ

ジ  
ュ  
プ





「あああつ、  
カリに舌が、  
ああつ！」

「はあ、はあつ……  
くあああつ  
カリに舌が、  
ああつ！」

「はあ、はあつ……  
くあああつ  
カリに舌が、  
ああつ！」

「じゅるっ、くちゅっ  
じゅるっじゅぼぼっ」

「お楽しみ下さい」

「その名の通り第三弾ですね。  
コンセプトは同じです。たつぷりと  
おち○ちんを尋問される男の  
もどかしい受け身の苦悩と快楽を

「くノ一達が体で男を尋問します其の二」

「くノ一達が体で男を尋問します其の二」



「くノ一達が体で男を尋問します其の三」

「金髪娘が登場します。裏設定で

密入国不良外人で不正貿易の

手助けをしてるんですけど、

作品内では全く触れられません(汗)。

……それはともかくいつもどおり

たっぷりと攻められてしまいます」

「ぺろっじゅぷつ、  
クチュ

ここがいいのかなっ

ぺろっちゅっ

「うはあ！はああ、

説明が頭に入らんっ」

ジュプッ

キュル



「くノ一師匠が若い男に

性的特訓を施します」

「この作品は前三作とは少し違います。未熟な忍者の男の子にくノ一が性の技を指導するおねショタ風味になっています。男の子は耐えろと命じられてもすぐに精を漏らしちゃいます。しかしさらに指導を受け……」

「あっああっ、

もう僕も漏れるっ

出しているっ?」

「じゅぽっちゅっ」

ジューッ

キゅル

ピキゅ



「作品をご購入してくれましたらお口に出して  
いいですよ。でもご購入はあくまでもあなたの  
意思ですからね」

「そ、そんなっ！」

「ほらほら、最後まで

気持ちよくなりたくない？

私のあったかいお口に

びゅっびゅって

精液いっぱい

出したくない？」

「くっ、うううっ」

ヒッ

ヒッ





ポロッ  
ポロッ

「くっ、そんな簡単にいいなりになって購入してたまるかよ」  
「ぺるぺる〜  
っんっん!」  
「はうううっ」  
「いまにも爆発しそうだよ」  
「くう、我慢だ我慢っ!」



「ペロペロペロ……」

おち○ちんがヒクヒク  
出したい出したいって  
言ってるよ」

「あああつ！さきつぽつ

わかったつ！ポチるつ！

自らの意思でっ

ポチポチポチっ

購入購入！」

ポッ

チユッ



「ふふっ、ご購入ありがとうございます  
ございます！他のムハキヤ作品も  
ご購入してはいかがでしょう？  
旧作はお得なまとめセットも  
ありますよ」

「はあはあっ、ポチッ  
ポチっはあっポチッ」

「それでは再開  
ちゆるっ、ぺろっ  
ちゅぱっ……んんっ」

チュル  
マッ  
ポッ

ジュ  
ッ  
ポッ

チュ  
ッ  
ポッ



「あ、まとめセットの中には今回紹介したくノ一ものも入っていますので、先に単品でくノ一ものを購入すると重複してしまいます。」

まずはまとめ作品をチェックしてからどれを購入するか検討するとよいでしょう」



「ポチっポチっ もらっ出る、出るうううっ！」「ぢゅるるるっ!!」

ズキユ



ジュルッ

ピキユ

マキユ



ムハキヤ 2017 07

ムハキヤまとめセット 01



「おっおおおっ……はあはああっ出るっ  
らっばら出るらっ」  
「んん……そう、全部私の口に出して……」



「はああああっ！」  
「んんうっ、濃いのがいっぱら！  
こくっんんっこくんっ……」



「んん」  
「ドクッ」  
「ビュッ」



「ふふ、いっぱいご購入して  
いっぱい精液も出しましたね」

「はあはあう……」

最高の射精だった……」

「ふう、ごちそうさま」

ビクッ

ビクッ

「ムハキヤ新作が出たらまたご購入お願いしますね。それではさようなら」

「はああ……これが焦らされる射精の快楽か……たまらんな」



「なんだったんだ彼女達は……まあ気持ちよ  
かったからいっか」

「完」





くノ一達が強引な  
販促活動をします

第二話

「さして、今日の夜のオカズはなんにしよう？  
……デジ同人を買うとするか」  
僕はデジ同人販売サイトのブックマを開き、エロい  
CG集を物色する。

気持ちが先走り、どれを買うか決める前からズボ  
ンを下ろしてしまう。

「これも良さそうだし、こっちもいい……」

ポキ

ポキ……



「こんばんは」

「はい、こんばんは……ええ!？」

突然の挨拶に自然に答えかけたが僕は一人暮らしで、こんな怪しげな格好のお姉さんが部屋に来る予定も心当たりも全く無かった。しかも僕は下半身丸出しだ。色々とまずい。



「えっ、ちよっ、誰あんたっ!」

「おっと、お静かに」

目にも留まらぬ速さでなにか鋭い武器を首元に突きつけられた。



「ひいっ!?!」

「静かにして下さい」

変質者が強盗かわからないが、全く音を立てず部屋に入り込む技術や武器を扱う身のこなしは只者ではない。とにかく逆らうのは危険だ。

「うう……は、はい。わかりました」

「うふふ、聞き分けのいい人でよかった」

僕が大人しくなったのを確認すると、お姉さんは武器を首から離した。

「エッチなCG集を購入しようとしてましたよね？」



「えっ!？」

「してましたよねっ？」

「は、はい」

「エッチなCG集が欲しいなら

## 「ムハキヤ」

というサークルの作品はいかがでしょうか？」

「はあ?そんなサークル聞いたことも……」

「お兄さん！長生きする秘訣は発言に気をつける  
ことですよ」

「う!?ぐぐっ……」

「あ、なんかムハキヤって結構作品数あるな。  
でも販売数は別にたいしたことな……」

「……お兄さん！」

「あ、いやっ、なんでもないです」

「今夜はムハキヤの、サキュバスや人外系CG集  
などご購入してみてもいいかがでしよう?」

「サキュバス?えーっと新作のやつとか?」

「淫乱なサキュバスに精魂全て搾り取られてしま  
う受け身の快楽。いいと思いませんか?」

「でも、人外系とか今まで買ったこと無いし、

よくわからないし……」



「それでは私が作品の解説をしてあげましょう。きっと欲しくなりますよ」

「え、いいよ解説なんて」  
話が長くなりそうだし、不審者には早く出ていってもらわなければ……。

「えっと、急に疲れが出たみたいで体もコリが酷くてもう寝ようかなみたいなホントホント」

「お疲れですか。では作品の解説をしている間、マッサージをしてあげましょう。」

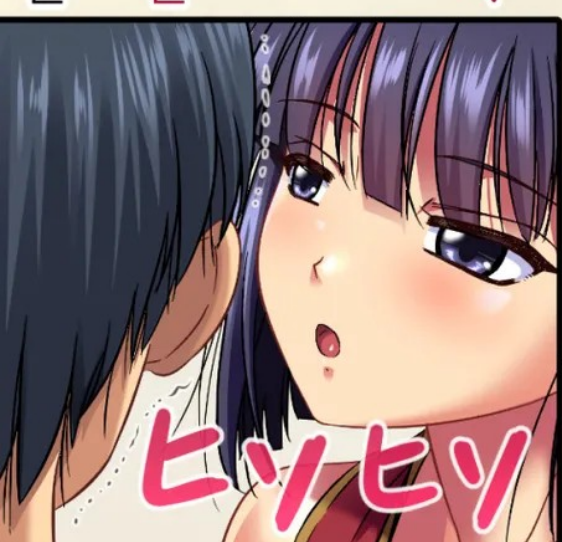
下半身を集中的に。

とっても気持ちよくて

疲れが吹き飛びますよ♥

「なっ!?……いい、いい

一応聞いてみようかなっ」



ヒッヒッ

「それではまず最新作の  
「檻の中のサキュバス」を  
紹介しますね。  
この作品世界の  
サキュバスは特殊な  
フェロモンで男を誘い  
快楽を与えながら  
命を吸い取る化け物です。  
シコシコシコ……」  
「あつ、ふううっ」

クチュ  
シコッ

シコッ



檻の中のサキュバス

「作品内では  
美しいサキュバスが  
お腹を空かせて  
主人公に食料提供を  
求めてきます。

勿論彼女の食料は  
精液で、食事とは  
男と深く交わること。  
どうです？興味が  
湧いてきましたか？  
クニクニツシュツ  
シュツシュツシュツ」



檻の中のサキュバス

「ううっ、あつ湧いてきたような全然のようなっあつはあつ」  
「この作品の主人公は湧き上がる欲望を押しさえきれずサキユバスと交わり快楽の虜になっていくのです」

ジュッ  
マキユ  
ジュッ



檻の中のサキユバス



「ああっそろそろもうっ! あっはあ 込み上げてきたっ」  
「購買欲が込み上げて 来ましたか?」  
遠慮なく購入して いいんですよ。  
シユシユシユシユッ  
「くああっ!  
込み上げてるのは そっちじゃなくて! 購買欲は別につ」  
「……………」



檻の中のサキュバス

「それは残念ですね……」

「あっ、もうちょいでイクからやめないでっあと少しなんだっ！」

「他の興味を持っていただけそうな男性を探すことにします。」

「終わりにしましょう」

「えっ、この状態でほったらかして帰っちゃうの？  
そんなんっ」

ビブーン

ヒクッ





「はいっ  
超興味湧いた！  
購買欲マックス！  
自分の意思で購入っ  
ポチっとな！」

ポチッ

ビブッ

ビブッ



「うふふっ、  
ありがとうございます。

解説とマッサージを  
続けましょう。

しゅっ、くにゅっ

しゅしゅしゅしゅ……」

「あああああつ！

出るっもうイクっ」

「どうぞそのまま

私の手の中で」

ムニユ

ムニユ

ムニユ

ムニユ

ムニユ

マチュ

マチュ

ムニユ

マチュ



「出るっはあああっ  
柔らかいお手々で  
いっぱい出るっ!」  
「んふふっ、  
びゅくびゅく  
元気な射精ですね」  
「くっふううっ  
はあっはああっ」

びゅわっ

びゅわっ  
どぽん  
どぽん

どぽん  
どぽん

「ふふ、まだカチカチ。

ムハキヤには

他にもサキュバスや

人外系ヒロインの

作品があるんですよ。

「サキュバス妹の

ご飯は俺の精液」

いかがですか？」

「ふっ、く……まだ

出し足りないけど

とりあえず

一発はイケたし

これ以上は

流されないぞ！」

ムニョ

クチュ



サキュバス妹のご飯は俺の精液

「サキュバス以外の  
人外娘作品では

「美しい鬼の女に

精と魂を搾り

取られる男の話

があります。

このあたりも

ご購入されては

いかがでしょうか？」

「ふうふう……」

沈まれ息子よ……」

マキユ

マキユ



美しい鬼の女に精と魂を搾り取られる男の話



「悪魔娘もいますよ。」

「悪魔娘に

搾り尽くされて」

いかがですか？」

「色々勧められても

もう買わないから。

誘惑に負けるもんか！」

「……仕方ないですね。」

いっぱいご購入

いただけたらお口で

おしゃぶりごっくん

マッサージに移るのですが

ここで終わりということだ

「えっ!？」

ビク

ビク





「はいっ  
ポチッポチッ  
ポチッ!  
購入購入購入っ!」

ポチッ  
ポチッ  
ポチッ

ビブッ

ビブッ



「んふふっ、  
ありがとうございます。  
ございます。  
それでは  
いっぱい

お口でして  
あげましょう。

ちゆるっ、ちゅっ

じゆるるっ、

ちゅぽっ」

「ああああっ、

舌がっああっ、

だめ裏スジ

ペロペロされたらっ

くううっ」

「んちゅっ

レロレロっ」

「ふおあっ」

ジュッ  
フポッ

ジュッ  
チゅっ

フポッ

んっ

ん

ふっ



「お回の中で  
おち○ぽ  
大暴れしてっ、  
ふふっ  
じゅるるっ、

んんっ

「ここが  
気持ちいいんですね、  
ぺろぺろっ」

「くはあ、  
なんという  
舌使いっ」

「あっあああっ」

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ



「じゅぷっちゅぷっ

んちゅっぷうっ」

「はあはあ、

うっ、くうう

ち○ぽとけるっ

ふおおっ」

「んんっちゅるっ

ふっううんっ」

んんっ

じゅぷっ

ふっ

じゅるっ

ふっ

じゅぷっ

マキユ



「もうイツちゃう  
お口に出して  
いいんだよねっ!」  
「んっ、どうぞ  
いっばい出してっ、  
じゅるじゅぽぽぽっ  
んちゅううう」  
「ああああっ  
もうっ!」

ふっ

ふっ

んっ

ジュッ

ジュプッ

ジュルッ

クチュ



「出るっ出るううっ

おおおっ」

「んっふううっ

こくっこくっ

んんっちゅうっ

「ふっはああっ」

「じゅるこくっ

こくっ……」

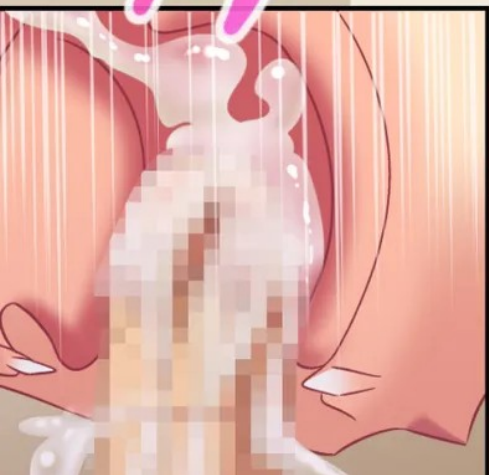
「はあはあ……」

ドゴッ

ドゴッ

ピュッ

ドゴッ





「びしょっ!」

「あふっっ!」

ビブッ

ビブッ

「ごくんっ」

「ふうっ……」

「今夜はたくさん

ご購入いただきましたまして

ありがとうございます

ございました。

それでは

さようなら」

「え？は、はい

さようなら」

ヒクヒク…



「……………」

「なんだったんだ彼女は……まあ最高に気持ちよ  
かったからいっか。とりあえず買った作品を見て  
みるとするか」

「完」



くノ一達が強引な

販促活動をします

第二・一話



現代社会の男性の

誘惑方法について研究をする梓

「何です、その格好は？  
強力な御札をいっぱい持って」  
「この世界ではチアガールと  
いうのが男に人気らしいんだ」



「その格好がチアガール？」  
「ありあわせで  
再現してみた。  
ミニスカつてのと  
黄色いヒラヒラ。  
これでだいたい  
あつてると思う。  
振りながら応援すれば  
男は瞬殺らしいよ」  
「まあ死にますけど。呪殺で。  
もう少しよく調べてみては？」



以下おまけ





